

小嶋先生を 偲んで

日時：和令1年12月18日(水)



相浦 洲吉
(神奈川県)



井上 達
(埼玉県)



新井 幹男
(東京都)



昨年12月18日に小嶋榮一先生がご逝去されました。とこの報が私に伝えられた時“え”という驚きの声しか出ませんでした。全く信じられない事でした。と言うのも12月4日に日本口腔インプラント学会50周年記念誌のための座談会で先生にお会いしたばかりだったのです。

先生に初めてお会いしたのは40年前の京都国際会館での学会に参加した時だったと思います。当時まだ私は当研究会に入会しておらず、そこで乙部先生の講演を聴いてそれをきっかけとして入会した時でした。

先生の第一印象は、ハッキリ言って派手でした、しかしよく言う言葉で“すごく様になって似合っ”ておられました。先生の雰囲気が好きになりました。もう一つ懐かしく思い出すのは地方にご一緒した時に私と同じメーカーのバッグを持っていた事です。ドイツの革製品のメーカーのもので私も集めていた物です。

当時のセミナーも思い出します。先生のインプラント治療の丁寧さと綺麗さから本当に多くを学ばさしていただきました。その中でなんと全調節咬合器を使って補綴をされていた事でした。すごい先生がおられる会に入会したんだと改めて思い、自分の

運の良さを感じました。

多くの学会参加の旅行にもご一緒させていただきました。アメリカインプラント学会(AAID)、AIA(現AOIA)、1982年のICOI(ハワイ・マウイ島)、その中で海外のインプラントを紹介して頂いたりした事が楽しく思い出されます。

日本インプラント臨床研究会は乙部朱門先生によって創立されましたが小嶋榮一先生と共に育てあげられました。動の乙部、静の小嶋と行ってもいいかもしれません。この二つが上手く混ざりあったのでしょ。その蕩蕩とされたあたりが小嶋先生の人間的魅力でありました。先生は日本のインプラント臨床の啓蒙と発展に本当に多く尽くされました。

小嶋先生に心からの感謝をし、ご冥福をお祈ります。

合掌
相浦 洲吉



令和元年12月18日、その半生を日本のインプラント治療発展の為に尽力された小嶋榮一先生が83年の偉大な人生の幕を閉じられました。

その訃報に接し先生との思い出が走馬灯のように私の頭を駆け巡りました。

思い起こせば私と小嶋榮一先生の最初の出会いは、今から40年以上も前、私がまだ学生の時に熊谷市の勉強会でスライド係のお手伝いをした時でした(何の勉強会だったかは忘れました)。卒業と同時に週一回、浜松町世界貿易センタービル14階の診療所に勉強に行かせていただきました。当時はナソロジーの時代で私も小嶋先生の実弟の壽先生のオーラルリハビリテーションや、バーチカル根充を見学に通っておりました。壽先生の周りには常に沢山の医師が見学に来ており、新人の私は後ろのほうになり首を伸ばしても人垣で全く見えないありさまで、途方に暮れておりました。そんな折、私の後ろから白衣をつかんで【これからはインプラントだよ】と声をかけてきた先生がいました。それが院長の小嶋榮一先生でした。

その優しい誘惑の言葉で早速、私はその年の4月に臨床研究会の1日コースに参加しました。秋にはその年の日本歯科インプラント学会に参加。何も分からないまま沢山の方々に紹介されましたが、小嶋先生から私のそばを離れないと言われていたためいつも一緒にそばにいらさせていただきました。小嶋先生の優しさにただただ感謝の気持ちでいっぱいです。



小嶋先生はニューヨークのリンコー先生のものでインプラントを学ばれましたので、毎年、アメリカのインプラント学会出席の際は、必ずニューヨークのリンコー先生のオフィスに立ち寄ってから学会の開催地へ向かっておりました。その上、ヨーロッパの学会やアジアでの講演会等世界を飛び回るといふ忙しい日々を送っておられました。

小嶋先生の人柄は【大変思いやりがあり、とこと

ん優しい】というのが当てはまると思います。常に温厚で、先生が怒った姿を見たことがありません。小嶋先生から昔は柔道の為に池袋の講道館に同級生の大山茂氏(極真空手USA代表)と通っており、二人で池袋界隈を肩で風切って歩いていたもんだと聞かされても信じがたい思いでした。小嶋先生は、大変後輩の面倒見が良いため、どこの学会に行っても、私達にも皆さんが気さくに声を掛けてくれます。これも小嶋先生のお陰ではないでしょうか。日本で臨床研究会のメンバーが今の地位にあるのは小嶋先生という偉大な英雄がいたから、私はそう思います。

ずっと忙しくしておられました。小嶋先生、どうぞゆっくりお休みください。



私達、臨床研究会のメンバーは、小嶋先生の教えを大切にこれからも日本のインプラント治療発展に寄与すべく日々、精進してまいります。

小嶋榮一先生のご冥福をお祈りいたします。

井上 達

会の発表で、卒業間もない若手の先生が、インプラントをデジタル診断してバンバン埋入した症例を発表している。ああ、時代は変わったなあと思います。

僕が、卒業後間もなく、故深井先生の所で修行していた40年近く前は、インプラントをしている者など皆無でした。

ある日、高輪のオフィスに帽子をかぶった、白づくめのいかめしい外科医がやってきて、骨膜下インプラントのオペを行い、卒業後1年未満の新人の僕も、見学させていただきました。

院長に聞くと、同窓の港区歯科医師会の先生でインプラント臨床研究会の会長とのことでした。

※大田善秋副会長より多数お写真をご提供いただきました。



その後、あれよあれよという間に、講習会の手伝い、国際学会の裏方、セミナー参加、総勢20名ほどの末席に入り込むことになりました。

会の行事に行くと、口をきくのもおこがましい気鋭の先生方が、ずらり。話題は、最新のアメリカのインプラントや、高度な歯科治療のことばかり。それなのに、あの小嶋先生が自ら僕のところへ来て「新井くん」と、いつも優しく声をかけて、笑顔で対応してくださいました。



海外の学会に行くと、モンゴリアン小嶋(笑)として、有名でお供させていただいた僕にも、著名なインプラントジストを紹介してくださり、いろいろ学ばせていただきました。その中には、大人のきれいな遊び方についてもありました。



自分が今でも心がけていることは、歯科インプラントジストの矜持についての言葉です。

歯科医療は、心で診るものだと言っていました。先生のケースプレは美しい写真と共に患者さんとの歴史が必ずありました。

会長を退かれた後もサポート役として、温かい目で我々を見守ってくださいました。

そして先生は、どんな時でも私たちを前面に立ててくださいました。安心感がどれだけのドクターを成長させたかはわかりません。

オフの時でも、我々の新年会やヨットクラブでの集まりなどにもよく来ていただき、丁寧なあいさつや励ましの言葉をいただいたことも忘れられません。



今でも、後ろを振り向くと小嶋先生が「新井くん」と声をかけてくれるのでは、と思っている自分があります。

小嶋先生の活躍と存在が日本のインプラントの世界を大きく繁栄させたのだと思います。

最後に、先生の勇姿と共に別れたいと思います。ありがとうございました。

新井 幹男





葬儀には当会はじめ大勢の関係者が参列され、メモリアルコーナーでは小嶋先生を偲ばれていました。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

